


令和7年度 綾瀬市立北の台小学校 学校関係者評価報告書(様式)

綾瀬市教育委員会の基本方針	(学校教育分野) 人を思いやり 社会を生き抜く力を身に付けた 綾瀬の子ども	
学校教育目標	よく考え、やりぬく子 明るく健康な子 広い心で思いやりのある子 進んで行動できる子	
学校経営方針 (グランドデザイン)	 <p>令和7年度 綾瀬市立北の台小学校グランドデザイン</p> <p>学校教育目標</p> <p>学校教育基本方針</p> <p>令和7年度 重点目標</p> <p>多面的に考え、表現できる子の育成</p> <p>学校の自己評価と改善策</p>	
今年度の重点目標	多面的に考え、表現できる子の育成	
取組分野	評価の観点	学校の自己評価と改善策
1 学習指導	学校は、「よく考えやりぬく子」「進んで行動できる子」を育てるために、工夫や改善に取り組んでいる。	およそ9割の児童が、前向きにねばり強く勉強することができていると回答しています。「学びを関連付けて自分の力にする子」という目指す子ども像の実現に向けて、児童同士の話し合いや学び合いの時間を大切にしながら学習を進めたり、発達段階に応じた家庭学習や自ら学習課題を決めて取り組む自主学習を推進したりしてきた結果だと考えられます。今後も児童の学びに対する達成感や充実感を高められるよう、自力解決や「話し合い」「学び合い」の時間をしっかりと確保し、苦手な学習や家庭学習にも意欲的かつ自主的に取り組んでいかれるような児童の育成を目指します。
2 教育課程	児童は、「学校行事や児童会活動など、特別活動」に積極的に参加している。	児童は、教科学習だけではなく、遠足、運動会、なかよしタイム(異学年交流活動)などの特別活動にも意欲的に取り組んでいます。また、そのような児童の姿を保護者も認めていることがうかがえます。学校は、このような児童の姿を継続または向上させることができるように、児童の実態をしっかりと把握し、教育効果が上がるような特別活動の内容や教育課程等の見直しを行っていきます。
3 児童・生徒指導	学校は、「広い心で思いやりのある子」を育てる指導を積極的にやっている。	8割近くの児童が思いやりの心をもって行動できていると回答しています。なかよしタイムやベア学年での活動、休み時間や放課後など、下級生に親切に接する高学年児童の姿が多く見られます。長期休業中には、特別な教科「道徳」の授業力の向上をめざし、外部講師を招いての研修を行いました。互いの授業を見合ったり、授業の記録を共有したりするなど、心の教育の育成に力を入れて取り組みました。今後も、授業や異学年交流などの取組をより充実させ、思いやりの心をもって行動できる児童の育成を目指します。
4 児童・生徒指導	児童は、友人や先生との学校生活に満足している。	今年度も、およそ9割の児童が学校生活に満足しているという結果となり喜ばしく思う一方、少数とはいえ「あまり思わない」「そう思わない」という児童が存在しているということをしかりと受け止めなければなりません。「関わりを通して生き生きと学ぶ子」の実現を目指し、全ての児童が学ぶ楽しさや学校生活の楽しさを実感できるように、これまで以上に努めていきます。また、学級で過ごすことのできない児童や登校することのできない児童もいるため、職員間の情報共有や連携、SCやS SW、S RAとの連携を行い、今後も担任(学校)とそういった児童(家庭)がつながり続けられるよう努めていきます。
5 児童・生徒指導	学校は、いじめの早期発見・再発防止のための取組を行っている。	いじめの早期発見、再発防止について、保護者と教職員の数値に開きがあることは残念に思います。学校での日常の取り組みが、保護者に見えにくいことは確かです。一方で、昨年度「あまり思わない」と答えた教職員4%が、今年度はゼロになりました。昨年度学校の取組に対する保護者の理解が増加したことに続き、今年度はさらに教職員全員が一丸となっていじめの早期発見、再発防止に向けて取り組んできたことが結果に表れたのだと考えます。保護者に向けては、今後も学校だよりや学年だよりなどを通じて、いじめ問題に真剣に向き合っていることを積極的に発信して信頼を得ることができるよう努めていきます。また、児童側からも代表委員会などを通じて「いじめ防止」につながるよりよい仲間づくりの活動を発信していくように支援してまいります。また異学年交流活動で思いやりの心情を育むことができるように、教職員が思いや意図をもって児童と関わっていくよう努めていきます。
6 保健管理	学校は、「明るく健康な子」を育てる指導に積極的に取り組んでいる。	本校では、今後も熱中症対策を十分に行い、季節を問わず、児童が業間休みや昼休みに外で元気に遊ぶことを促してまいります。体育科の授業の充実を図るとともに、児童が楽しみながら体力の向上やけが・病気の予防、健康の保持増進を図れるような取組を工夫し、本校の児童が心身ともに明るく健康に過ごせるように努めてまいります。

7 安全管理 教育環境整備	学校は、児童の安全のための指導や施設の点検・整備に取り組んでいる。	児童の安全に対する職員の意識は高いものがあります。学校が児童にとって安全な場所であることを保証し、児童に安心感をもたせるために、職員の高い危機管理意識を維持していくことが大切だと考えます。そのために、施設の安全点検や児童への安全指導の取組が充実したものになるよう努めています。そして、児童一人ひとりが自ら多面的に考え、判断し行動できる力を育成するよう指導を工夫していきます。また、児童が安心して地域で過ごすことができるように、より一層保護者や地域の方とも協力し、安全対策に取り組んでいかれるよう、努めています。
8 支援教育	学校は、児童に応じた支援の工夫をしている。	本校では、全職員が児童一人ひとりに目を向け、寄り添うことによって児童の状態を把握し、教育相談コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーや医療機関なども連携しながら、必要に応じた支援を行っています。また、学習支援者による一人ひとりの児童に対応した学習・集団適応支援にも努めています。さらに、児童理解を進めるための職員研修を行ったり、学習支援の体制を学期ごとに見直ししたりするなど、よりよい支援・指導となるように工夫しています。不登校児童の学校復帰の支援や不登校の未然防止等のためのサポートルームが導入され、登校できるようになった児童が増えています。
9 組織運営	校長を中心とした運営組織になっている。	「そう思う」「ややそう思う」と肯定的な回答をした職員の割合が、昨年度の9割からさらによい結果となっています。職員が丸丸となって学校運営に取り組む意識がより高まっていることがうかがえます。今後も、すべての児童のよりよい成長を願うことを第一とした企画や運営を心がけ、その評価を適切に行い、より質の高い学校運営へと改善していくように努めています。
10 教職員の研修	学校は、教職員の力量を高めるための取組に力を入れている。	今後も、児童が将来必要とされる力を身に付けることができるよう、校内研究や研修等を通して、教材研究や授業改善に取り組んでいます。一方で、教材研究や授業改善への意欲はあるものの、それ以外の業務に時間を取られ、十分にできていないという面もあります。そこで、働き方改革の視点を持ち、業務や会議等の見直し、改善に努めています。また、教員が互いの知識や経験を出し合い共有することで、限られた時間を有効に活用し教職員の資質・力量の向上につなげていきたいと思えます。
11 教育目標 学校評価	学校は、児童の実態を把握し、よりよい児童の成長のための工夫をしている。	およそ8割の保護者が学校の取組を肯定的に受け止めてくださっています。しかしながら、保護者と教職員の間には依然として差がある状況です。学校はこの結果を謙虚に受け止め、児童の個性や特性を理解し、より一層児童の自己肯定感を高められるような指導を心がける必要があります。児童の可能性を引き出し、伸ばすことができるよう、家庭や地域とも連携しながら、全職員でよりよい児童の成長につながるよう努めてまいります。
12 情報提供 保護者・地域 住民との連携	学校は、保護者などに適切な情報を提供し、連携を図る取組を行っている。	学校から発信した情報は、およそ9割の保護者に届き、理解されているようです。今後も、学校は保護者に、教育方針や学校運営の方向性、教師の思いや願い等をできるだけ多く発信する機会を設け、それらをさらにわかりやすく伝えられるような工夫を行う等、積極的な情報発信に努め、保護者、地域の理解や意見を得ながら、よりよい教育活動を目指していきます。
<p>【学校運営協議会委員からの意見及び改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者向けアンケートの回収率が高い。デジタルだとつい後回しになってしまうので、アナログでやっているのがよいのかもしれない。 どの項目でも保護者の理解が高い。 授業参観などの機会に、保護者が参加し子どもと一緒に何かを製作するような活動を、地域の力を使いながらやっていくと良いのではないかと。最近では父親も参観に来られるような世の中になっているので、そのような取組を行うことで、より保護者の理解も深まるのではないかと。 地域ボランティアの方に参加してもらい取組が増えていて、とても良い。学校で教科の学習以外にも様々な体験をすることができると、喜びや驚き、感動などを味わうことができ、不登校等の子どもにとっても心を癒すことのできる場になるのではないかと。 「学校行事や児童会活動などに進んで参加しましたか。」という質問に「そう思う」と答えた児童の割合が20%減少した背景が把握できるとよいのではないかと。 異学年交流活動を一年間固定のメンバーでグループ分けをして行っているが、学期毎にメンバーを入れ替えるなどの取組があってもよいかもしれない。そうすることで、様々な人と関わることもでき、多様な価値観に触れる機会にもなるのではないかと。様々な工夫ができると思うので、今後検討してもらいたい。 		